

# 筆者の主張を的確に読み取る授業展開

尾道市立栗原小学校 浅貝祥輝

## 1 実践の趣旨

ある説明文の教材を学習した際に、目の前に座る子どもたちの元気がなかった。これまでしてきたように、初読の感想を書き、段落分けをし、各段落の要約をし、まとめていった、しかし、このような授業では児童の活発な思考は生まれないのではないか、と疑問を感じた。なんとかして授業を変え、児童が意欲的に学習する姿を見たいと思い、私なりに原因を探り、学習過程の工夫を行ってみた。ここにその実践の一端をご報告したい。

## 2 実践の概要

(1) 単元名 よりよいくらしについて話し合おう 教材「もうどう犬の訓練」(東京書籍 3年下)

(2) 単元の目標：書かれていることを段落ごとに読み取り、盲導犬について調べて分かったことを話し合う。

(3) 単元構想

第一次 文章全体の内容をとらえる・・・二時間

- ・ 筆者の主張を意識した初読の感想を書く。
- ・ 感想を交流し、学習のめあてをつくる。

第二次 文章構成を考えながら、内容を理解する・・・十時間

- ・ 「はじめ」、「なか」、「おわり」に分け、内容を読み取る。
- ・ 段落相互の関係をつかむ。

第三次 学習のまとめを行う・・・六時間

- ・ 学んだことを生かして働く犬について調べ、説明文を書く。
- ・ 自分の書いた説明文の発表をグループごとに行い、わかったことや疑問などを話し合う。

(4) 「つな引きのお祭り」での反省点

本教材を学習する以前に「つな引きのお祭り」の学習を行った。その際に子どもの生き生きした姿がみられなかった原因について考える。

例えば、「刈羽野の大綱引き」についてまとめる授業において、子どもたちは次のようにまとめていた。

- ・ つな引きに勝って、一年のはずみをつけたいというねがい。
- ・ 上町のねがいは、米のねだんが上がってほしい。下町のねがいは、米がよくとれてほしい。
- ・ つな引きに勝って、一年のはずみをつけて米づくりをがんばる力をつな引きでつける。
- ・ 負けてしまったら、一年のはずみが見つからないから、上町も下町も勝ちたいと思っている。

これらのまとめは、意味段落の要旨つまり、「その地域に生きる人々の願い」という視点を持つことができなかった、ということをよく表している。これでは、筆者が伝えたいことを考えようとしても、子どもたちの思考の焦点は定まらない。

## (5) 実践

そこで、本単元では次の手立てを行ってみた。

## ① 筆者の主張を意識して、教材文を読ませる。

「この文章を通して、筆者がみなさんに伝えなかったことは何だろう、」という課題を学習のまとめの段階で与えていたが、今回は初読の直後に子どもたちに考えさせてみた。

初読後に「この文章で筆者が伝えなかったのはなんだろう。」と発問した、筆者が読み手に何を伝えたいのかを大まかに捉えさせようと試みた、子どもたちは次のように書いた。

筆者は、もうどう犬は、目の不自由な人の生活を守ってくれるすごい犬で、そのためには一才から訓練をし、やっと一人前になると言いたかったんだと思います。

もうどう犬が、どんな訓練をして、どんな感じに動くのか。もうどう犬は、どのくらいきびしく訓練をしてきているのか。もうどう犬はどんなふうに住生活をしなればいけないのか、と言うことを筆者は伝えたいのだと思う。

ぼくは、犬は目の不自由な人にとって体の一部（目の不自由な人にはぜったいにひつよう）になるために訓練をずっとされてきた犬として、目の見えない人をカバーしている存在だ、と思う筆者の気持ちを感じてもらいたいのだと思います。

目の不自由な人にとってみたら家族と思いました。もうどう犬は目の不自由な人に安全な生活を送るために訓練をうけているのだと思います。

「やっと一人前になれる」という記述の中に、盲導犬がユーザーの身体の一部を担う働きをするために、大変な訓練を積む必要であることを子どもなりにつかんでいると考えることができる。

## ② はじめ・なか・おわりの構成に着目させる。

今までは、形式段落ごとに要約を行い、段落相互の関係を明らかにしていく「ボトムアップ型」の授業を行ってきた、しかし、今回は、筆者の主張を意識しながら文章構成に注目した後に、意味段落の相互関係をとらえていく「トップダウン型」へ変えてみた。

まず、初発の感想を交流することで筆者の主張を子どもたちの中に意識づけた、また、文章全体を「はじめ・なか・おわり」で構成されていることを確認していった。

次に、「はじめ」・「なか」・「おわり」には、「もうどう犬になるためのしつけ」・「人間のいうことにしたがう訓練」・「人を安全にみちびく訓練」・「訓練を通して見つける心がまえ」・「使う人と一緒に生活する仕上げの訓練」・「もうどう犬としての暮らし」といった小見出しをつけていった。

## ③ 「はたらく犬」の説明文を書く

学習のまとめでは、子たちが知りたい働く犬について調べ、説明文を書く活動を取り入れた。これには、2つのねらいがある。1つ目は、文章を「はじめ」・「なか」・「おわり」で構成することが読者にものごとを伝えるときの工夫になることに気づくこと。2つ目は、筆者が作品を書いた時の動機である、驚きや発見を子どもたちに共感させたいことである。

説明文は、働く犬について「どのようにして一人前になるか」という視点で書くことを共通の課題とした。

その際、集めた資料をもとに「はじめ」・「なか」・「おわり」の文章構成をまずノートに考えさせた。「な

か」には「さいしょは」、「次は」のような順序を表す言葉を用いるよう指示した。作文の書き方を思い出しながら、友達同士で交換して読み添削を何度も繰り返した。

### 3 成果と課題

#### (1) 成果

この単元を通して、今まで国語の授業に積極的でなかった子どもが私のそばに来て、『もうどう犬の訓練は好き。』と言ってきた。ほかの子どももたくさん発表する姿をみることができた、児童がいきいきと考えることができたからではないだろうか。

##### ①筆者の主張を意識づける

初発の感想では子どもたちは意外にも、筆者の主張に近いものを捉えていた、主張を意識することにより、子どもたちの発言で訓練以外の考え（例：盲導犬のユーザーに関するもの等）が出された際などは、「この文章全体で筆者は、訓練について書いてあるのだから・・・」と軌道修正し合うようになった。子どもたちの思考の基盤ができたと言えるのではないか。

##### ②「はじめ」・「なか」・「おわり」の構成に着目させる。←意味段落から脱皮した

意味段落をとらえ、段落相互の関係をとらえる「ボトムアップ型」の授業とは逆に、「はじめ」・「なか」・「おわり」の構成を知った後に意味段落をとらえる「トップダウン型」の授業の方が何について考えているかを明確にしながらか授業をすすめることができた。今までは、それぞれの意味段落の内容をとらえることで精一杯だったが、「トップダウン型」にすることで、例えば、『訓練の内容』の何についてかいてあるか」を意識しながら考えることが思考の基盤となって、内容を的確に読み取ることに繋がったといえる。

##### ③「はたらく犬」の説明文を書く

何度も添削をするのは根気のいる作業で、そのうち飽きるかと心配したが、子どもたちは悪戦苦闘しながらも、一人一人が納得のいくまで自分の作品を仕上げることができた。

出来上がった作文を発表し合っ、わかったことや疑問に思ったことを話し合うときは、自分の力でまとめた文章だけに、内容の充実した話し合いをすることができた。

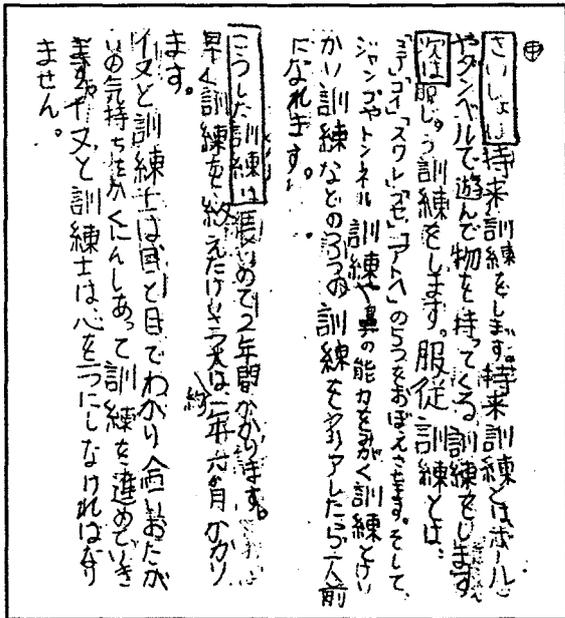
え	て	一	人	前	の	け	い	さ	つ	犬	に	な	る	の	で	す	。
め	い	路	を	ク	リ	ア	ス	ル	と	一	人	前	に	な	り	ま	す
こ	の	よ	う	に	け	い	さ	つ	犬	は	長	い	訓	練	を	お	し
か	を	訓	練	し	な	け	れ	ば	い	け	ま	せ	ん	。	こ	の	足
い	ま	す	。	ど	う	ら	に	も	。	に	お	い	に	対	し	て	の
追	求	犬	と	は	人	の	持	て	い	た	物	か	ど	う	か	。	
け	い	さ	つ	犬	に	は	足	あ	と	も	追	う	犬	。	足	せ	ま
す	。																
か	い	訓	練	を	し	た	り	し	ま	す	。						
こ	う	し	た	訓	練	を	し	て	足	あ	と	め	い	路	も	し	ま
す	。																
次	に	鼻	の	う	か	も	み	が	く	訓	練	を	し	ま	す	。	
こ	の	訓	練	は	足	あ	と	の	に	お	い	を	追	た	り	。	
か	い	た	に	お	い	と	同	じ	に	お	い	も	当	て	た	り	。
け	い	訓	練	を	し	た	り	し	ま	す	。						
こ	の	訓	練	は	生	後	六	月	か	ら	一	年	ま	ど	ま	。	
す	。																
ア	ト	ヘ	。	な	と	命	令	を	し	ま	す	。					
く	じ	り	訓	練	と	い	う	の	は	言	葉	も	お	は	え	す	。
さ	い	し	ょ	は	ふ	く	じ	り	訓	練	を	し	ま	す	。		
け	い	さ	つ	犬	は	た	ら	へ	犬	の	な	か	間	で	。		
て	訓	練	さ	れ	た	犬	な	の	で	す	。						
に	は	た	ら	く	犬	も	い	ま	す	。	は	た	ら	く	犬	は	。
と	し	て	の	と	く	長	を	生	か	し	た	り	。	お	さ	え	た
大	は	か	し	こ	く	人	間	と	な	か	よ	く	な	れ	る	動	物
で	す	。	ま	た	。	も	う	ど	う	犬	の	よ	う	に	人	間	の
三	年	三	組	う	の	野	ま	さ	は								
げ	い	さ	つ	犬	の	訓	練										

(2) 課題

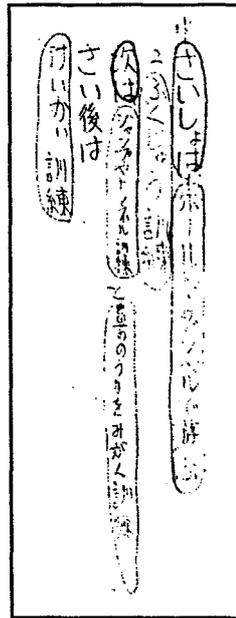
確かに、子どもたちは以前より内容を明確に読み取り、筆者の書きぶりを自分の説明文に生かすことができた。しかし、説明文を書く際に自分の集めた情報のまとめ方に難しさを示す子どもたちが多くいた。

「さいしょは」・「次は」といった順序を表す言葉を使うように指示したためか、メモの段階から本文を書き出す子どもが多数いた。(児童例1) 中には、「一訓練」と短く書くことができていた子どももいたが少数である。(児童例2、3)

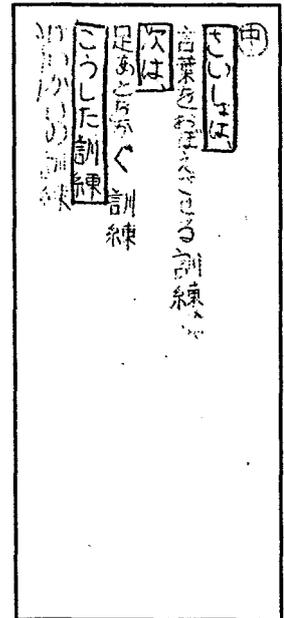
書く活動においては、「はじめ」・「なか」・「おわり」の構成からスタートするが、メモからキーワードを考え、本文を書く流れは、「トップダウン型」の活動にはならないのかもしれない。



児童例1



児童例2



児童例3

4 おわりに

この単元の学習を通して、説明的な文章をいきいきと読み取らせるには、児童に筆者の主張を確認した後、その主張を伝えるためにどんな工夫や仕組みを文章全体でデザインしているかを考えさせる「トップダウン型」の読みの有効性を感じた。初発の感想を書かせたとき、子どもたちがどんなことを書くのか不安ではあったが、案外よく読んでいたことが分かった。子どもたちの読む力を私自身がよく把握してなかったことが明らかになった。

まずは、その文章で筆者が伝えたいことを意識しながら読む、そして、筆者が読者に伝えたい事をいかに分かりやすく、伝えようとしている筆者の工夫を考えることが、学習指導要領における「C 読むこと」(1) 目標(3)「目的に応じ、内容の中心をとらえたり段落相互の関係を考えたりしながら読む能力を身につけさせる」ことになるのだと考える。

子どもが学習後、学校からの帰り道に友だちと、また、家での親子の会話の中で、国語で学習した内容を興味深く語る、そのような姿を私はこれから目指していきたい。